

Hot Voice

英語教育の 将来

中嶋 嶺雄
国際教養大学 学長

いよいよ本格化するグローバル化の時代に直面して、国際的なコミュニケーションの手段としての英語力が、これまでの時代とは比較にならないほど重要になってきている。ひるがえって、日本人の英語力はどうか。総じてあまりにも貧弱だと言わざるを得ない。国民の約半数が大学へ進学するようになりつつあるというのに、中学で3年、高校で3年、大学で4年と多くの学生は英語を10年間も学んでいるはずなのに、大学を卒業して英語で仕事のできる人材(TOEFLのスコアで600点前後もしくはそれ以上)は、毎年大学卒業生の1%にも満たないことが統計的にも明らかになっている。だとすれば、残りの99%以上の大学卒業生については、10年間も学んできた英語がほとんど役に立たないことになる。こんな有様で日本は21世紀の国際社会で十分やっていけるのだろうか。

このような危機意識から、英語教育のあり方を根本的に見直すべきだとの共通認識に立って、旧文部省の中に「英語教育指導方法等の改善に関する懇談会」が発足したのが、平成12年1月のことであった。たまたま小学校の学習指導要領が改定され、小学校3年生からの総合学習の時間に「国際理解教育」が導入されることになっていたため、そこでの英語教育についても



論じられ、さらには中学・高校・大学の英語教育の一貫性についても議論された。私はこの懇談会の座長を務めたが、1年間にわたって激しく議論がたたかわされた。最終的には国民全体の英語力を高めるという課題と、国際社会で活躍し得る英語力を備えた人材の養成という課題との2つの座標軸を設定することによって、報告をまとめることができた。文部科学省は引き続き英語教育の改善策を有識者に聞く懇談会を設け、さらに『英語が使える日本人』の育成を目指す行動計画』を平成14年7月に策定した。こうした英語教育の改善に関する限り、文部科学省は一貫して揺るぎのない計画を策定して、かなり早いピッチで実行し始めており、ここ数年の変化は目を見張るばかりである。

このような蓄積の上に、この4月には初等中等教育局の管轄下で中央教育審議会の外国語専門部会が発足した。今回も私が主査を務めているが、1年以内に小学校から英語教育を正課として導入すべきかどうかの結論を出すことになっている。様々な意見がある課題なので、英語教育先進県としての秋田県民の意見を是非寄せていただきたいと思っている。もとより、国際社会で活躍する人材のための英語教育に関しては、県民の皆さんのご支援で開学した国際教養大学が、責任をもって行うつもりである。

なかじま みねお

昭和11年 長野県松本市生まれ

昭和40年 東京大学大学院修了 社会学博士

専門は国際社会学、中国・東アジア研究。

昭和56年著書『北京烈烈』でサントリー学芸賞、平成15年「正論大賞」受賞。

現在、アジア太平洋大学交流機構(UMAP)国際事務総長、文部科学省中央教育審議会委員(大学院部会長、外国語専門部会主査)。

主な著書に『国際関係論』『中国・台湾・香港』『二十一世紀の大学』など。

教育あきた 6

2004 No.657



特集

学習状況調査 &
高校入試分析
..... 4



CONTENTS

SPOT	男鹿海洋高校 ^山 2
HOT VOICE	中嶋 峰雄さん 国際教養大学 3
教育実践	大館ホテヤ幼稚園 10
TEA TIME	時田 敬教諭 鷹巣小学校 加藤 彰教諭 秋田工業高校 12
県民の声	秋田県民カレッジ 13
TOPICS	フェンシング世界選手権出場 他 14